

★くまのチロ吉ものがたり★



もえるイロイロ島

沖井千代子 作
田畑精一 絵



もえるイロイロ島

★くまのチロ吉ものがたり★

沖井千代子作 田畑 精一 絵



偕成社のAシリーズ 2

も え る イ ロ イ ロ ^{じま}島

——くまのチロ吉ものがたり・1——

NDC 913 偕成社 218p. 22cm 1980年

発 行 1980年10月 初版第1刷

著 者 ^{おき}沖 ^い井 ^ち千 ^よ代 ^こ子

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京5—1352番

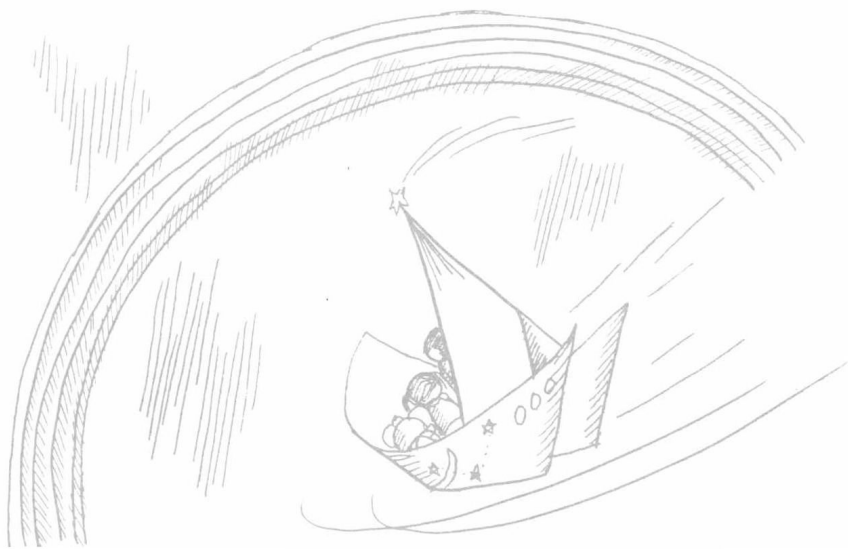
印 刷 新興印刷製本株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

8393-525020-0904

Printed in Japan © 沖井千代子 田畑精一 1980



とおいにじのむこうに、うつくしい島^{しま}があるの。
ほんとうよ。三人と一ぴきが、いったんだもの。



ジュン

せんちよう
船長と

おちやめな



ケン

やさしい

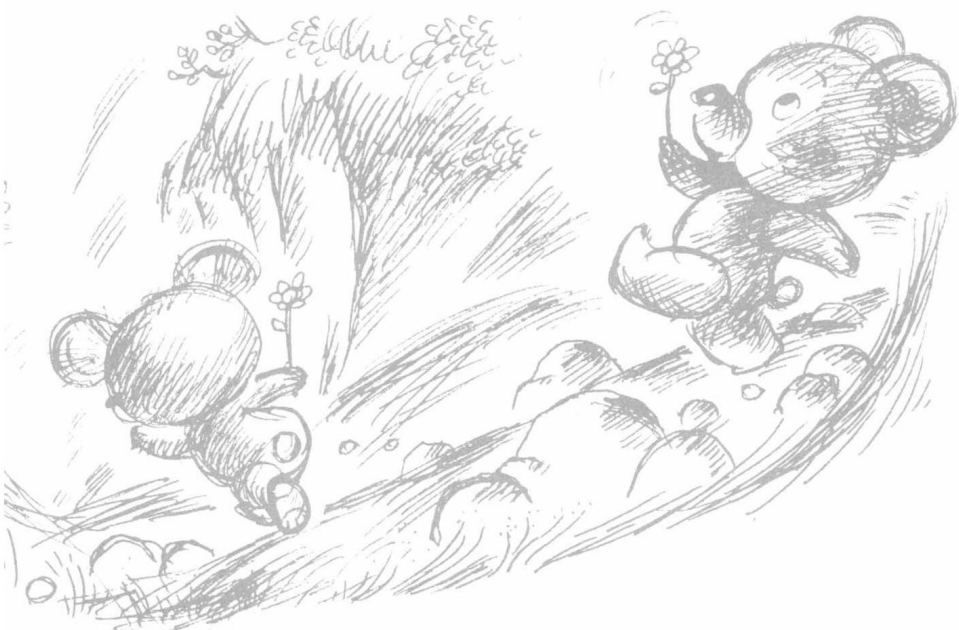


ミミコ

チロ

そして、いさましいい……？

ごめんなさい。チロは、はずかしがりやで、かく
れてでてこないの。チロのことは、すみませんが、
本の中でよんでください。



もくじ

I・空とふ北斗丸ほくとまる

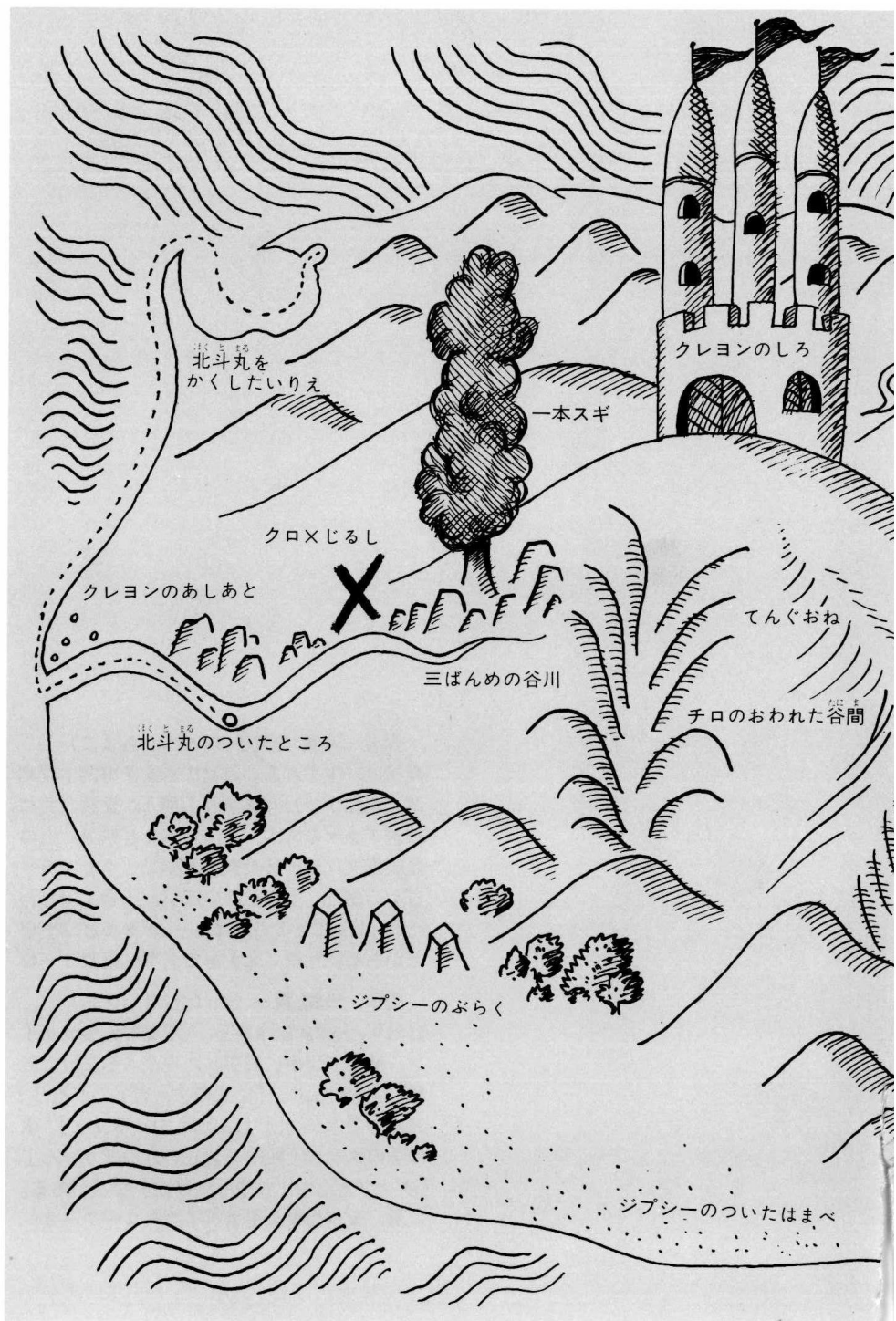
1	やくそくは、やぶられた	10
2	かがやく、ほかね船 ぶね	21
3	イロイロ島 じま	36
4	クレヨンの兵隊 へいたい	52
5	船 ふね は？ チロは？	63
6	ろうやの中のチロ	76
7	クレヨンのしろ	90
8	クロのへや	102
9	お日さまの土地 とち	114
10	森にながれる、たいこの音	126

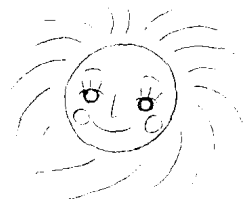


Ⅱ・イロイロ島^{じま}に朝がくると

1	おじいさん ^{きゆうじやたい} 救助隊	136
2	出口 ^{でぐち} はない	148
3	もえる島 ^{しま}	163
4	ふしぎな光 ^{ひかり}	172
5	ほのおの中の、うごかないむれ	181
6	たき火 ^び のそばで	191
7	うつくしいおか	201
8	ちぎれ雲 ^{ぐも}	210
	あとがき	217







作者・沖井 千代子（おきい ちよこ）

愛媛県に生まれる。県立広島女子専門学校卒業。現在「びわの実学校」同人。童話と共に放送ドラマの脚本、上演台本など執筆。山口県芸術文化奨励賞受賞。著書に、「くまのチロ吉ものがたり」三部作のほか、「歌よ川をわたれ」「ひばだこがんばる」「ホタルとぶ」などがある。住所／名古屋市名東区極楽2-43

画家・田畑 精一（たばた せいいち）

1931年、大阪に生まれる。人形劇の人形デザイン、製作の仕事に従事し、現在人形工房に所属。主な作品に、「くまのチロ吉ものがたり」三部作のほか「くいしんぼうのロボット」「水の上のタケル」絵本「おいしいのぼうけん」「ダンブえんちょうやっつけた」などがある。住所／東京都東久留米市学園町2-7-2



I・空とぶ北斗丸



1 やくそくは、やぶられた

ミミコのうちのえんさきで、アマリリスの花が、ことしはじめて、ぱっと赤くさきました。

アマリリスは、さきのぐうんとひらいたトランペットを、たのしそうにふいているように、さいっていました。

「ミミコちゃん、そとへでてごらん！ そとは風がおいしくて、それはすてきよ。でてごらん、そとへ！ トテター、トテ、トテター！」

ミミコは、チロをわきにかかえて、とびだしました。へそとへでるときには、かならず、いきさきをいってでるゝそういう、おかあさんとのいつものやくそくをやぶっ



て、ミミコは、おうちをとびだしました。

それはミミコだけが、わるいではありません。トランペットをふきならして、そとへさそいだした、アマリスもよくないのです。

ミミコがやくそくをわすれたのには、もうひとつ理由がありました。ミミコは、おかあさんからセロファンをもらったのです。それは大きくて、キラキラ光っていて、とてもきれいでした。

「ジュンちゃんとケンちゃんに見せて、いばってやろう。」

ミミコは、セロファンとチロをもって、そとへとびだしました。

ミミコは、おかあさんとのやくそくをわすれても、くまのチロは、どんなときでもわすれることはありません。もし、このぬいぐるみをわすれるような、そんなことがあるなら、そのときこそミミコにとって、天と地がさかさになるような、なにかがおこったときだけでしょう。

「トテター、トテ、トテター！」

ミミコは左手にチロ、右手にセロファンをもって、スキップで遊園地へ。

そのころ、ミミコのうちでは、おかあさんが、ふんでいたミシンをとめました。

「ミミコ！」

へんじがありません。

「げんかんの戸があいたと思ったら、ミミコ、やっぱりそとへでたのね。いきさきをいってでるようになって、あんなにいつてあるのに。」

おかあさんはまた、カタカタカタと、ミシンをふみはじめました。

* * *

ミミコのうちから、遊園地をへだてたむこうに、アパートが六つ、ならんでいます。その四の二〇六のまどは、遊園地のほうをむいていて、風のつめたい日でも、よくひらいていました。

四の二〇六というのは、四つめのアパートの、二階の六つめのうち、そういう意味ですが、よくひらいているのは、そこに、ジュンとケンのふたりのきょうだいですが、すんでいるからでした。

遊園地のそばの道を、いろいろの自動車がおります。

「ケン。こんどくる車、なんだと思う。」

「そうだなあ。ダンプカーだな。」

「ぼくは、ミキサー車だ。」

走ってきたのは、小さなスクターでした。

ふたりが、まどの手すりに手足をからませながら、そとを見ているところは、そとから見れば、動物園どうぶつえんのおりの中の、二ひきのサル、といった感じかんじでした。

「こんどは、なんだ？」

「ぼくは、パトカーだと思う。」

「ケンは、ふつうのパトカーだろうけどさ、ぼくは、黄色きいろい車体しやたいの、道路どうろパトロールカーだ。」

ふたりが目をこらしていると、オンボロ木橋きばしをゆるがせて、のろのろやってきたのは、たんぼをたがやす耕運機こううんきでした。ふたりは、顔かおを見あわせてわらいました。

そのときでした。遊園地ゆうえんちに、なかよしのミミコがあらわれました。いつものように、チロをかかえています。



（ちえつ、チロのやつ。ミミコちゃんにかわいがられて、いい気になってやがって！）

ふたりはいつも、そう思っています。ミミコが、右手をふりました。すると、ミミコのまわりでなにか、キラキラと光りました。

もし、ミミコのまわりが、キラキラ光りさえしなかったら、ふたりは、おかあさんとのいつものやくそくを、まもっていたでしょう。へそとへあそびにいくときには、アパートのドアをあけっぱなしで、とびだしたりはしない。そういう……。